

「共同体感覚」を育むために

17日(水)、特別支援教育にかかると学校訪問で県の木全指導主事を迎え研修会を持ちました。授業を提供していただいた支援学級の先生方にお礼を述べるとともに、とてもいい勉強ができたことをうれしく思っています。

みんなにやさしい特別支援教育」を掲げて取り組んでいる本校ですが、木全指導主事の話も聞いて、私は、みんなにやさしいということの意味を「共同体感覚」というキーワードからも考えられる、という思いを強くしました。

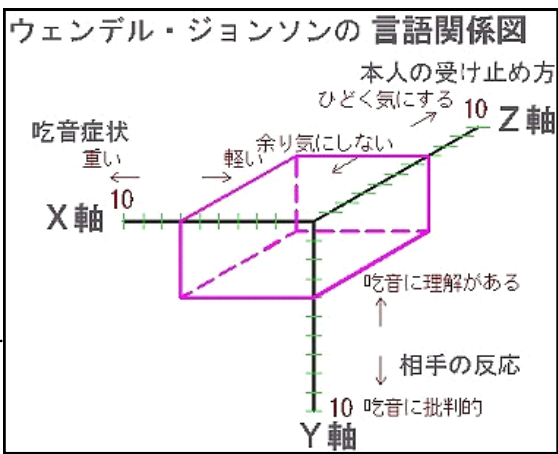
年のせいかわい話だとは思いますが、その内容がぼやけてしまいます。それで、木全指導主事の講話記録を起し、私の心に響いた部分を整理してみました。

先生方も、お読みいただき、再確認していただければありがたいです。

集団の中に入りにくい子への支援のあり方

特別な支援を必要とする子どもに支援を行う時に、アブローチの仕方としては、障害そのものを軽減して「こころ」に近づける方が一つある。アメリカの言語学者、ウエーデル・ジョンソン。彼には吃音がある。対人関係にも支障がある。

本人の受け止め方
ひどく気にする
10 Z軸
吃音に理解がある
相手の反応
吃音に批判的
10 Y軸
吃音症状
重い
10 X軸
余りにしない
軽い



あるので、何とか吃音を直そうとした。しかし、治るメカニズムが不明で有効な治療法は見つかっていない。ジョンソンは、障害をゼロにするのは果たしてできるのか」と思い始めた。

言語関係図

ジョンソンは「障害」を箱の容積で考えた。箱の容積が増えれば増えるほど障害が重くなる。まず、X軸を「障害」として考えた。でも「見えにくい」「知的な遅れがある」など、障害そのものの、そういう状態が悪化すればするほどX軸は伸びる。

今までの障害児教育は、障害そのものをゼロにすれば箱自体が消失するのではないかと、いつか考え方が変わった。目が見えるようになり、日常生活に差し支え

なくなれば、箱自体が消える。ただ、Xは取り去れるものなのか。いろいろな配慮をすることによってXを軽減することはできる。だからやれることはやったらいい。しかし、取り去れる障害のあとにも残る障害があるということも考えなくてはならない。障害をなくす」ということを目標に掲げてしまうと、そのほとんどが簡単になくなってしまう。取るのが簡単なところは簡単に取れるから、やっとながら向上しない領域が生まれてくる。障害を取り去る克服する「はた」で限界がなくなる。

障害の改善「克服」というX軸だけの改善を考えると、その子はだんだん勇気をくじかれています。ジョンソンはもう2軸考えました。Y軸とZ軸。「Y軸は周囲の反応」例えば、子どもの「こころ」に対して周囲がどう反応する

か。抑える馬鹿にする、認めない、助けない、手を貸さない、施設的に改善できるところを改善しない、といった冷たい反応をすると、Y軸は伸びる。

もう一つZ軸は、X軸やY軸のある状況の中にある「わたし」を本人がどう感じるか。本人がどう理解するか。少徳先生の指導案の中に「自己有能感が育つべき」と書いてあった。自己有能感が育つ「ゼロ」に近い。

Xは全く変わらなくても、Y軸・Z軸が伸びれば「障害」という箱の容積は増えてしまっている。従って、どうしたら箱の容積を減らして「はた」ができるのか。

もちろん、X軸を短くできたらいい。でも、通常学級で交流する子どもたち「通常学級の担任が直接アブローチするのはなかなかできない。特別支援学級担任が自立活動で「生懸命取り組んでもやっぱり限界があるのではないかと、X軸を短くして、自己有

